

旧約聖書 出エジプト記 32章 1、7-14節

テモテへの手紙一 1章 12-17節

ルカによる福音書第15章 1-10節

先週、96歳、在位70年の女王様が崩御されました。女王様のご崩御の直後、宮殿上空に大きな虹がかかったという報道もあり、まるでおとぎ話の世界のようでもありました。女王様は聖公会の信徒の代表であり、任命されたのは主なる神様です。わたしたちの国では、評価は分かれますが世界的に様々な大きな業績のある指導者の暗殺がありました。今を生きているわたしたちにはわかりませんが、未来の日から今年を振り返った時、今年、大きな時代の変化のしるしとなる時であるのかもしれませんが。

そのような中でわたしたちの教会の歩みも続きます。先週から「ぶどうの木」の礼拝が始まりました。今週から「聖書を学ぶ会」も再開します。今月は「子どもとともにささげる聖餐式」「敬老の日の礼拝」もあります。8月が夏休みであったわけではありませんが、教会の様々な歩みが再開される9月が2週目となりました。

さて、『聖書（旧約）』は、主なる神様とイスラエルとの関係について数多くの記述があります。それには、主なる神様に従うイスラエルと、主なる神様の命令に従えなかったイスラエルの両方があります。ことに、従えなかった失敗の記述があること、それが『聖書（旧約）』の重要性を示していると思います。一般論ですが、人間は、誰かの成功談からも学びますが、失敗談からも多くのことを学ぶからです。他の人と同じようにしても成功するとは限りませんが、同じようにすれば失敗することは多いのです。

イスラエルが失敗してしまう理由の一つに、理性的に判断したことがあります。人間としては正しい道を選んだつもりが、主なる神様の視点では、間違っていたということです。理性的判断は重要ですが、同時に理性的判断を超えた、主なる神様に対する信頼も重要なのです。これは単純であると同時に、具体化が非常に難しい事柄です。

そのような前提を踏まえた上で、本日の旧約日課「出エジプト記」を見ますと、興味深いところが沢山あります。本日の箇所は、モーセが山で主なる神様から十戒の板を頂く物語の一部ですが、そのような重要な出来事において、なぜそうなるのかと、考えさせられる箇所が多いからです。

本日の箇所は、「**モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て**」（出エ 32：1）から始まります。モーセが、山に登る記述は24章です。そこには「**モーセは従者ヨシュアと共に立ち上がった。モーセは、神の山へ登って行くとき、長老たちに言った。『わたしたちがあなたたちのもとに帰って来るまで、ここにとどまっていなさい。見よ、**

アロンとフルとがあなたたちと共にいる。何か訴えのある者は、彼らのところに行きなさい。』」（出エ 24：13-14）」とあります。モーセは、何かあったらアロンとフルのところへ行きなさいと指示していたのでした。

モーセがどれぐらい山にいたのかは、24章の最後に「**モーセは雲の中に入って行き、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた**」（出エ 24：18）と説明されています。そのあとの25章から本日の箇所直前31章まで、主なる神様がモーセに伝えた、イスラエルに対する様々な命令・指示が続きます。それらの内容は、契約の授与という重要な場面で伝えるべき事柄か？と思う内容です。幕屋建設の指示、設置する箱、机、燭台の寸法、幕屋の構造など、神殿祭儀に関する具体的な指示であるからです。

この部分はそれ自体重要ではありますが、物語の全体の流れとしては、読者に神殿に関する何かを伝えることとは、別の効果を与えています。それが意図された編集かどうかわかりませんが、40日間待つというイスラエルの民の不安や苛立ちを、読書行為を通して共感させるという効果です。物語の先が気になる読者に対して、間にある神殿祭儀に関する記述は、待つことを求めるからです。

モーセがなかなか戻らないのでイスラエルの民は、不安になり、「**さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです**」（出エ 32：1）と言います。先に見た通り、何かあったらアロンのところへ行きなさいと指示したのは、モーセ自身でした。きわめて理性的な判断です。モーセは、イスラエルの民を信頼してそのような指示を出したのでしょう。そして、イスラエルの人々も、その指示通りにしたのですが、そこからが本日の聖書日課の箇所です。

40日というモーセの不在日数が、事実かどうかはわかりません。40という数は、いろいろなまとまりとして『聖書』では用いられるからです。そのような一つのまとまりの日数を経たのち、イスラエルの人々は、我慢できずにアロンに訴えかけたのです。そして、その時点で、いくつもの間違いをしていました。一つは、「**神々**」という表現です。もう一つは、その「**神々**」を「**造ってください**」という発想です。そして、「**エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセ**」という現状認識です。

そもそも「出エジプト記」20章の十戒を示した場面で、最初に主なる神様は「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。」（出エ 20：2-4）と命じています。「主なる神様」は唯一であるので、「神々」でもなく、無数にある神々の一つでもありません。イスラエルにとって、ほかの神々は、神ではないのです。また、その「像」を人間が造ってもいけないの

でした。そして、当然、人間が造った像を拝むことも許されないのです。そして、そもそもイスラエルをエジプトから導き出した方は、人間の手で造られた見える像ではなく、人間が見ることのできない「主なる神様」です。イスラエルの民は、十戒の第一戒めから破ってしまっていたのです。しかし、周囲の文化では、自分たちの神様を自分たちで像として造って拝むことは、一般的です。イスラエルは危機に瀕した時、常識的・理性的に考えたのでしよう。

アロンは、本来、モーセの代理人として、イスラエルの人々を主なる神様の命令通りに指導する必要がありました。しかし、彼は、そうしませんでした。その部分は聖書日課では省略されていますが、彼は民から金を集め、金の若い雄牛の鑄像を造ることを命じます。そして、アロンはそれを見て、その前に祭壇を築き、「明日、主の祭りをを行う」（出エ 32）5）と宣言してしまふのでした。「主の祭り」の「主」は、「主なる神様」の名前ですから、その部分だけは正しいのですが、余計に間違いが鮮明になります。そして、イスラエルの人々も「これこそわたしたちの神々だ」と礼拝してしまふのです（出エ 32：2-6）。これに対して、当然主なる神様は大変に怒り、それをモーセがなだめます。その部分が7節以降の本日の聖書日課です。

主なる神様は、モーセに民の間違いを告げるだけではなく、「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である。今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする」と怒りを示します（出エ 32：9-10）。この表現から感じるのは、この時、主なる神様の方が怒りで理性を失っているように思えることです。そして、「モーセは主なる神をなだめて言った」（出エ 32：11）とあり通り、モーセの方が冷静かつ理性的に主なる神様をなだめるのでした。なぜならば、イスラエルの民を主なる神様が導き出したのか、その目的自体が変わってしまうからです。救うために導き出したのであって、滅ぼすためではないからです。

主なる神様に対して、大変な間違いをしてしまったイスラエルの人々ですが、彼らの事情も理解できなくもありません。エジプトを出て長い旅をし、荒野の山（おそらくシナイ山）の近くまで来て、いよいよという時に、指導者であるモーセが長期不在となり、もう自分たちは戻ることも進むことともできない状態です。場合によっては、ここまで来て全滅の可能性もあります。代替りの新しい指導者の下、自分たちを導いている神がどのような方であるかを、周囲の宗教文化をおそらく参考にして、像を作るという見える形で具体的に表し、この危機を乗り越えたいと判断したのでしょう。その判断は、理性的であり、かつ現実的であったといえます。

そのようなイスラエルの人々の間違いの記述の直前、本日の聖書日課の直前ですが、そこには、「主はシナイ山でモーセと語り終えられたとき、二枚の掟の板、すなわち、神の指で記された石の板をモーセにお授けになった」

(出エ 31:18) とあります。物語の流れとしては、イスラエルの人々が、待ちくたびれてアロンに話しかけた時には、主なる神様は十戒の二枚の板をモーセに与えていたのです。おそらく、そのあとは板をもって山を下りただけであったのでしょう。

読者にとって、これらの記述の連続は、あと少しまてばイスラエルの人々は間違いに至ることはなかったことに気づかされると思います。そして、危機に瀕した時の理性的判断が、決して良い方向へと向かわないことにも気づかされます。主なる神様を信頼して、いつまで待ち続けるのか、その時点ではわからないとしても、後から考えれば、あと数日待つだけでもよかった、主なる神様と人間との関係は、人間の思いを超えている、そのような事柄をも、この物語の連続は示していると思います。同時に、そのことは、奴隷状態から導き出され、長い旅をして、主なる神様に（なんとか）従ってきたイスラエルですが、簡単に信仰を失ってしまう存在であることをも示しています。これらのことは、時空を超えて、すべての信仰者に当てはまる事柄といえます。

怒る主なる神様を、論理的にそして理性的になだめたモーセですが（その部分が本日の聖書日課です）、そのあとの物語では、あまり冷静ではありませんでした。聖書日課に続く部分ですが、「宿営に近づくと、彼は若い雄牛の像と踊りを見た。モーセは激しく怒って、手に持っていた板を投げつけ、山のふもとで砕いた。そして、彼らが造った若い雄牛の像を取って火で焼き、それを粉々に砕いて水の上にまき散らし、イスラエルの人々に飲ませた。」

(出エ 32:19-20) とあり、モーセは、主なる神様からいただいた十戒の板を砕いてしまうのです。モーセも、金の子牛の像とそれを拝む民の姿を、目の当たりにしたとき、理性を失ってしまったのです。

すべてが破綻してしまったような物語の流れですが、最終的に罰せられるものが罰せられ、イスラエルの人々が主なる神様を信じることをあらためて心に刻み、十戒の板がもう一度渡さされるという結末となります。理性的な？結末で終わります。

本日の特禱に「神よ、あなたに寄らなければわたしたちはみ心にかなうことができません」という文言があります。これは言い換えれば、人間には理性がありますが、その理性を用いて行動したとしても、必ずしもそれが神様の思いに合うものではないと語っているのだと思います。そして、だからわたしたちはこのように祈るのです。

理性的であると同時に理性を超えた歩みをする、それは簡単なようで困難です。しかし、だからこそ、イエス様が様々な模範を示してくださっています。本日のたとえ話もその一つです。そして、そのイエス様を通して集められるのが、教会です。今まで行ってきた歩みが再開されている9月ですが、その一つひとつを、祈りながら丁寧に実行しつつ、これからも主なる神様を信頼しながら歩んでいきたいと思えます。